

第17号

2019年7月

きらら坂

関西セミナーハウス活動センターだより



今、ここで 榎本 栄次

「あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない」(出エジプト記 20 : 3)。

令和の時代に入り、新しく天皇が即位した。憲法で定められた国民の象徴として、日本と世界の平和のために皆から愛され、尊敬される働きをされることを期待したい。

ただし、ここで問わなければならないことは天皇の神格化ということである。巨額の国費を使って、天皇が天照大神の子孫として、国民の上に神として立つ。その儀式が10月22日に国家行事として行われようとしている。ここに大きな問題を感じる。

かつて昭和天皇が、現人神として侵略戦争の旗頭となったこと。それによってアジア諸国に多くの迷惑をかけた。国中がそれに右へ倣えとなった。社会も、学校も、家庭も宗教も、その前に奴隷状態になった。天皇を超越的存在として掲げることにより、一切ものが言えなくなった。

「国を守るため」「子供を守るために」「教会を守るために」「家を守るために」がうたい文句になり、盲目にさせられた。しかしそれは、それは国を守ることであり、子どもたちを守ったのだろうか。またそれがキリスト教であったらよかったということではないだろう。

上に掲げる言葉は、モーセの十戒の一節である。その4つまでが「神でないものを神とするな」を内容とする「偶像の禁止」である。「その像を刻んではならない」「それにひれ伏してはならない」「みだりに神と

主の名を唱えてはならない」である。

これはイスラエルの民のエジプトの奴隷から解放される大事業において、最も大事にした掟である。エジプト人や他の国の人々にではなく、ユダヤ人に定められた掟である。神ご自身が「神の名をみだりに唱えるな」というように、ユダヤ教やキリスト教であればいいということではない。

エジプトを脱出して放浪の民となったイスラエル人にとって、貧困と恐怖の連続であった。解放を許さないと追い迫るエジプトの大軍、行く先を阻む紅海の海原。他の国々も弱小の民に襲い掛かる。自然の驚異。飢え、乾き、内部分裂。そのような絶体絶命の場で、どこに立つかが問われている。選ぶ余裕などない。

今日の日本人に奴隷という意識はない。豊かで自由である。だから自分たちで自分に似せた神をつくり、神を選ぼうとする。神をも道具にしようとするのである。天皇もその道具にしようとする。

よく考えてると、今日のわれわれは金や名誉や権力の奴隷状態におかれているのではなかろうか。子どもたちも競争社会の中でロボットのようにされ、考えることを忘れ、自由を失ったエジプトの奴隷のような状態に置かれている。

追い詰められて行き場を失った人たちが少なくない。引きこもる人たちの暗闇は、他人事ではない。

神でないものを神としようとするとき、人は本来の在り様から外れ、奴隷状態に入っていくということを知りたい。

◇おさそい◇

8月20～21日（火 14:00～水 15:30）

エキューメンカル・ネットワーク第3回協議会<共催>

「日本におけるエキューメンカル運動の課題と展望
～ 現場からの問いかけ ～」

8月31日（土）13:30～17:30

修学院フォーラム「社会」③<平和を考える-3>

「日米地位協定と九条、そして自衛隊」

講師 伊勢崎 賢治（東京外国語大学大学院教授）

♡ありがとうございました♡

関西セミナーハウス活動センターへの賛助・寄付金

2019.5.1-6.30 順不同・敬称略

斉藤洋子、松岡蓉子、日野多栄子、藤倉寿美子、松田光代、殿村元一、相浦和生、株式会社ころ、医療法人わたなベクリニック、田辺信子、陶村世佳子、東 千代、織田雪江、岡山孝太郎、湖月美和、佐藤友紀、山岡義生、宇野 稔、上田圭子、橋 俣子、多木秀雄、菅 恒敏、藤田恭子、比嘉美智子、竹中百合子、佐々木紘児、高橋 望、林 律、川北かおり、松本圭子、山添みどり、楠葉コイノニア教会、東 千代、酒井哲雄、内藤弘子、坪野えり子、山岡義生、家形日出、佐野千枝子、堤 龍春、北野宗香、早川良彌、宮本桂子、喜多村やよい、春名康範、酒井凉子、柳井一朗、森 正幸、大谷光真、長塩滋子、葛原茂樹、新宗連 橋本浩志、山崎和明、大野三枝子、藤田敦子、NPO 法人 沢内伯楽、日本基督教団西が丘教会。

✧ なんどきですか ✧

・日韓関係がぎくしゃくしている。従軍慰安婦や徴用工の問題が問い直されている。どちらも譲らない膠着状態である。これは過去として決して軽視されるべきことではない。両国のために。

・犯した過ちをしっかりと丁寧に謝罪することからやり直すべきだろう。

それをぼやかして金で済まそうとするからいつまでたっても解決しないのではなかろうか。金ですべてを済まそうとすると、逆効果になることがある。

・力や金で他の国を押さえつけようとする侵略行為はもう通用しない。時代遅れだ。

・イエスの言葉「偉くなりたいと思う者は仕える人になりなさい」。
(by E. E.)

投稿 京都俳句きらら会他

- | | |
|------------------|----|
| ・万緑に包み込まれたる空き家かな | 茶香 |
| ・河鹿鳴く川の瀬音と草の香と | 星児 |
| ・朝風呂か犬の水入れシジューカラ | 海楽 |
| ・そよ風に吹き寄せられし青田こけ | 枯骨 |
| ・残雪を刻みて嶺は高く座し | 虚舟 |
| ・駅前を急ぐ人波走り梅雨 | 周豊 |
| ・草を引く人見え園の里薄暑 | 岳 |

関西セミナーハウスの四季だより

～しちがつの旬～

庭園担当 榊 廣光

7月に入ると四条通り界限では「コンチキチン」と祇園囃子が響く。京の夏を彩る風情である。

山間の清流では貴婦人がキラッキラッと幾度となく身を翻し艶美な舞を披露している。そう「鮎」である。香魚とも年魚ともいう。今の時期の鮎は、若鮎といわれ人間でいえば成人期に入ろうとするところである。京都では鴨川本流や高野川で目にすることができる。さらに足を延ばせば上桂川花背地区や美山川芦生地区で、より美しいものが乱舞している。だがいずれも放流ものばかり。つまり稚魚をイクスである程度飼育し大きくして放流したものだ。良質なものは鮎を水面からきった瞬間、そこら一面に甘〜いスイカの香が漂う。育つ水質に大きく左右される。「おいぼし」といわれるエラ近くの斑紋、腹ビレや尾ビレなどがまっ黄色でまさしく容姿端麗である。

さて、この鮎を食することとなると、かの食通の作家池波正太郎節が頭をよぎる。一番は鮎の塩焼きだろう。踊り串にしたものを炭火で時間をかけてこんがり狐色に焼きあげる。熱々を食すればほろ苦さがある香しく絶品だ。炭火焼にかぎる。

もうひとつは鮎飯である。しょう油の薄味をつけた飯がふきあがったところへ新鮮な鮎をいっしょに炊きあげ、身をほぐしてかき混ぜ、熱々の飯にネギや大葉をこまかく刻んで混ぜこみ食すれば、おかわりしたくなる。これぞ夏の至福である。

追記 先月号で掲載したツバメの巣作り。6月末に卵がふ化し巣立ち特訓中だ。先日巣の建物屋上の縁にヒナ鳥が行儀良く一列に並んでエサ待ちをしていた。ピカピカの一年生だ。親がエサをくわえて戻ってくると、一斉に激しく鳴いてエサを催促している。が、親鳥はちゃんと覚えているのか順番に平等に与えているようだ。人の社会も、争いなく秩序を守って平和に暮したい。彼らの来年の里帰りが楽しみである。